

【晉紀十六】 起著雍困敦，盡重光單閼，凡四年。

■東晋、▲前燕、統国訳漢文大成。經子史部 第 6 卷 047p より

顯宗成皇帝上之下咸和三年（戊子，328年）

【蘇峻は建康占領】

■春，正月，溫嶠は入りて建康を救い，（武昌より南下して）尋陽に軍す。

■〔司馬流は敗れて死す〕韓晃は司馬流を慈湖に襲う。流は素より懦怯にして，將に戦わんとし，炙（炙り肉）を食らいて口の處を知らず（周章狼狽する様），兵敗れ而して死す。

■〔庾亮は蘇峻の間道すを迎撃失敗〕丁未（28日），蘇峻は祖渙、許柳等衆二萬人を帥いて，横江よりわた濟り，牛渚（山の名、安徽省蕪湖道當塗県の西北 20 里、現・馬鞍山市当塗県）に登り，陵口（牛渚山の東北）に軍す。台兵は之を御ぎ，屢々敗れる。二月，庚戌（1日），峻は蔣陵（蔣山の阜）の覆舟山（船を伏せた形の山）に至る。陶回は庾亮に謂って曰く、

「峻は石頭に重き成り有るを知り，敢えて直ちに下らず，必ず小丹楊（丹楊の太守の旧治所の秣陵県、江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区）の南道に向かいて歩き來たらん。宜しく兵を伏せて之を邀えれば，一戦にして擒とす可き也。」（6-048p）

亮は従わず。峻は果たして小丹楊より來たり，迷いて道を失い，夜行きて，復た部分無し。亮は聞き，乃ち之を悔やむ。

■朝士は京邑の危逼るを以て，多く家人を遣り東に入りて避難し，左衛將軍の劉超は獨り妻孥を遷して入りて宮内に居らしむ。

■〔蘇峻は放火し、迫る〕詔してへんこん卞壺を以て大桁東（呉・会稽）諸軍事を都督せしめ，侍中の鐘雅と與に郭默、趙胤等の軍を帥い及び峻と西陵（晉書成帝紀には陵西）に戦う。壺等は大いに敗れ，死傷は以て千を數える。丙辰（7日），峻は青溪柵を攻め，卞壺は諸軍を帥いて拒み撃つも，禁ずる能わず。峻は風に因りて火を縦ち，台省及び諸營寺署を焼き，一時に蕩盡す。壺は背癰（背中の腫れ物）新たに愈え，創は猶ほ未だ合あわず，疾やまいを力めて左右を帥いて苦戦し而して死す。二子のしん瞻、盱は父の後に隨い，亦た敵に赴き而して死す。其の母は屍を撫でて哭きて曰く、

「父は忠臣と為り，子は孝子と為り，夫れ何をか恨まん乎！」

■〔建康防衛に失敗し、庾亮は尋陽に奔る〕丹楊尹の羊曼は兵を勒して雲龍門を守り，黃門侍郎の周導、廬江太守の陶瞻と皆な戦死す。庾亮は衆を帥いて將に宣陽門内に陳ぜんとし，未だ成列に及ばず，士衆は皆な甲を棄てて走り，亮は弟の憚、條、翼及び郭默、趙胤と俱に尋陽に奔る。將に行かんとし，顧みて鐘雅に謂って曰く、

「後事は深く以て相い委ねるなり。」

雅は曰く、

「棟折れたろき榱の崩れるは，誰之とが咎ぞ也！」

亮は曰く、

「今日之事は，復た言うを容れず。」

亮は小船に乗り，亂兵は相い剝掠す。亮の左右は賊を射，誤りて舵工（舵取り）に中たる，弦に應じて而し

て倒れる。船上は咸な色を失いて散ぜんと欲し、亮は動かず、徐^{おもむろ}に曰く、

「此の手は何ぞ賊に著け使む可し！」（このよく射る手は賊の身に着ければ弦に应じて倒すのに、惜しいことだの意味）

衆は乃ち安ず。

■ 〔褚裒の働きで蘇峻の兵は殿に登らず、後宮を掠奪す〕峻の兵は台城に入り、司徒の導は侍中の褚裒に謂って曰く、

「至尊は當に正殿に御すべし、君は啟して速かに出で令む可し。」

裒は即ち入りて閣に上り、躬自ら帝を抱きて太極前殿に登る、導及び光祿大夫の陸曄、荀崧、尚書の張闓は共に御床に登り、帝を擁衛す。劉超を以て右衛將軍と為し、鍾雅、褚裒と與に侍して左右に立たせ、太常の孔愉は朝服して宗廟を守る。時に百官は奔り散り、殿省は蕭然とす。峻の兵は既に入り、褚裒を叱して下ら令め、裒は正だ立ちて動かず、之を呵して曰く、

「蘇冠軍は來たりて至尊に覲^{まみ}える、軍人は豈に侵逼するを得るや！」

是に由りて峻の兵は敢えて殿に上らず、後宮に突入し、宮人及び太后の左右の侍人は皆な掠奪せ見る。峻の兵は百官を驅役し、光祿勳の王彬等は皆な捶撻せ^ら被れ、負擔^{ふたん}して蔣山（鍾山、江蘇省金陵道江寧県東北、現・南京市江寧区）に登ら令められる。裸剥されたる士女は、皆な壞席苦草を以て自ら藪^{おお}い、草無き者は地に坐し土を以て自ら覆う。哀號之聲は、内外を震動す。

■ 〔白服の者は助かる〕初め、姑孰は既に陷ち、尚書左丞の孔坦は人に謂って曰く、

「峻之勢いを觀るに、必ず台城を破らん、戰士に非らざるよりは、戎服するを須^{もち}いず。」

台城は陷ちるに及び、戎服の者は多く死し、白衣の者は他無し。

■ 〔蘇峻は官の財産を使い盡くす〕時に官に布二十萬匹、金銀五千斤、錢億萬、絹數萬匹有り、他の物は是に稱^{かな}う、峻は盡く之を費やす。太官は惟だ燒餘の米數石有りて以て御膳に供す。(6-049p)

■ 或は鍾雅に謂って曰く、

「君の性は亮直なり、必ず寇仇に容れられず、盍ぞ早く之が計を為さざるや！」

雅は曰く、

「國亂れて匡^{ただ}す能わず、君危くして濟^{すく}う能わず、各々遁逃して以て免かれるを求めれば、何を以て臣と為すや！」

■ 〔蘇峻の政治体制〕丁巳（8日）、峻は詔と稱して大赦し、惟だ庾亮兄弟のみ原例（許す例）に在らず。王導の德望有るを以て、猶ほ本官を以て己之右に居ら使む。祖約を侍中、太尉、尚書令と為し、峻は自ら驃騎將軍、錄尚書事と為り、許柳を丹楊尹と為し、馬雄を左衛將軍と為し、祖渙を驍騎將軍と為す。弋陽王の蒙^{よう}（前卷咸和元年に爵を降す）は峻に詣り、峻の功を稱述し、峻は復た蒙を以て西陽王、太宰と為し、尚書事を錄せしむ。

■ 〔吳國內史庾冰は卒の機転で逃げる〕峻は兵を遣わして吳國內史（吳郡を吳国となし太守を内史とす）の庾冰を攻め、冰は御ぐ能わず、郡を棄てて會稽に奔り、浙江に至り、峻は之を購うこと甚だ急なり。吳の鈴下の卒は冰を引きて船に入れ、蓬蔭（竹の簾）を以て之を覆い、吟嘯^{かい}して柂（船を進める道具）^なを鼓らし、流を溯り而して去る。（警）邏所に逢う毎に、輒ち杖を以て船を叩いて曰く、

「何れの處にか庾冰^{もも}を覓めん、庾冰は正に此に在り。」

人は以て酔えりと為し、之を疑わず、冰は僅かに免れる。峻は侍中の蔡謨を以て吳國內史と為す。

■ 〔溫嶠はあくまで庾亮を重きと為す〕溫嶠は建康の守られずを聞き、號慟す。人は之を候する者有れば、悲哭して相い對す。庾亮は尋陽に至り、太后の詔を宣し、嶠を以て驃騎將軍、開府儀同三司と為し、

又た徐州刺史の郗鑒に司空を加える。嶠は曰く、

「今日當に賊を滅ぼすを以て急と為すべし、未だ功有らず而して先ず官に拜せば、將に何を以てか天下に示さん！」

遂に受けず。嶠は素より亮を重んじ、亮は奔敗すると雖も、嶠は愈々之を推して奉じ、兵を分けて亮に給す。

後趙 後趙は大赦し、改元して太和とす。■**三月**，丙子（58日?），**庾太后**は憂を以て崩ず。

■**蘇峻**は南して於湖（続は于湖）に屯す。

後趙 **〔石堪は祖約を攻める〕** **夏，四月**，後趙の將の石堪は宛を攻め、南陽太守の王國は之に降る。遂に進みて祖約を攻め淮上に軍す。約の將の陳光は兵を起こして約を攻め、約の左右の閻禕は、貌は約に類す、光は約と謂^{おも}ふい而して之を擒とす。約は垣を逾えて免かるるを獲て、光は後趙に奔る。

■**壬申**（24日），**明穆皇后**（**庾太后**の諡）を武平陵に葬す。

【陶侃を立てて蘇峻を破る】

■ **〔范汪は建康の状況をもたらす〕** **庾亮**、**溫嶠**は將に兵を起こして**蘇峻**を討たんとす、而るに道路は斷絶し、建康の聲聞を知らず。會々南陽の**范汪**は尋陽に至り、言う、

「**峻**の政令は壹ならず、貪暴縱横にして、滅亡は已に兆あり、強きと雖も弱くし易し、朝廷は倒懸之急有り、宜しく時に進みて討つべし。」

嶠は深く之を納れる。**亮**は**汪**を辟して護軍の事に參ぜしむ。

■ **〔反撃の盟主に陶侃を立てんとす〕** **亮**、**嶠**は互いに盟主と為すを相い推し、**嶠**の從弟の**充**は曰く、

「**陶征西**（**陶侃**は征西大將軍で荊湘雍梁州の都督）の位は重く兵は強し、宜しく共に之を推すべし。」

嶠は乃ち督護の**王愨**期を遣わして荊州に詣らしめ、(6-050p) **陶侃**を邀えて之と與に同じく國難に赴かんとす。**侃**は猶ほ顧命に豫からざるを以て（恐らく**庾亮**が喜ばないと思って）恨みと為し、答えて曰く、

「吾は疆場の外なり、將に敢えて局（内輔、外輔それぞれ分あり）を越えざらんとす。」

嶠は屢々説くも、回す能わず。乃ち**侃**の意に順い、遣使して之に謂って曰く、

「**仁公**は且^{しば}く守るべし、僕は當に先ず下らん。」

使者去りて已に二日、平南參軍の**柴陽**の**毛寶**は別に使いして還り、之を聞き、**嶠**を説いて曰く、

「凡そ大事を擧げるは、當に天下と之を共にすべし。師の克つは和に在り、異同は宜しからず。假令疑う可きも、猶ほ當に外には覺らざるを示すべし、況んや自ら攜貳（離心、二心有り）を為す邪！宜しく急に追信して書を改め、言うに必らず應に俱に進むべしと。若し前信に及ばざれば、當に更に遣使すべし。」

嶠は意悟り、即ち使者を追いて、書を改める。**侃**は果たして之を許し、督護の**龔登**を遣わして兵を帥いて**嶠**に詣らしむ。**嶠**は衆七千有り、是に於いて尚書に列上し、**祖約**、**蘇峻**の罪狀を陳じ、告を征鎮に移し、泣を灑^{そそ}ぎて舟に登る。

■ **〔溫嶠は再度陶侃を説き、陶侃は昼夜兼行して進軍〕** **陶侃**は復た**龔登**を追いて還らしむ。**嶠**は**侃**に書を遣りて曰く、

「夫れ軍は進む有り而して退く無し、増す可く而して減ず可からず。近ごろ已に檄を遠近に移し、盟府（**陶侃**の府）に言い、後月（來月）の半ばを刻して大舉せんとし、諸郡の軍は並びて路次に在り、惟だ**仁公**の軍の至るを須^まち、便^{すなわ}ち齊^{ひと}しく進む耳。**仁公**は今軍を召して還せば、遠近を疑惑せん。成敗之由は、將に此に

在らんとす。僕の才は軽く任は重く、實に仁公の篤愛に憑り、遠く成規を稟ける。首に戎行を啟く（軍の先鋒）に至り、敢えて辭するに有らず、僕は仁公と與に、首尾を相い衛り、脣齒は相い依るが如き也。恐らくは或る者は高旨に達せず、將に仁公は賊を討つに緩なりと謂わいとすることを。此の聲は追い難し。僕は仁公と並びて方岳之任を受け、安危休戚、理既に之を同じくす。且つ頃之顧みより、綢繆（纏わりつく）往來し、情深く義重く、一旦急有れば、亦ち仁公の衆を悉くして救われることを望む、況んや社稷之難を乎！今日之憂いは、豈に惟だ僕のみならんや。一州の文武は翹企（足をつまだてて待ち望む）せざるは莫し。假令此の州が守られず、約、峻が官長を此に樹置すれば、荊楚は西は強胡に逼り、東に逆賊に接し、之に因るに饑饉を以てせんには、將來之危きは、乃ち當に此州之今日より甚しき也。仁公は進みて當に大晉之忠臣と為り、桓、文之功に參ずべし。退きては當に慈父之情を以て、愛子（侃の子の瞻が蘇峻に殺される）之痛みを雪ぐべし。今約、峻は凶逆にして無道なり、天地を痛感し、人心は齊壹に、咸な皆な切齒す。今之進討は、石を以て卵に投じるが若き耳。苟くも復た兵を召して還せば、是れ幾んど成るに敗ると為す也。願はくは深く陳ぶる所を察すべし！」

王愨期は侃に謂って曰く、(6-051p)

「蘇峻は、豺狼也、如し遂に志を得れば、四海は廣しと雖も、公は寧んぞ足を容れる之地有る乎！」侃は深く感じ悟り、即ち戎服して舟に登る。瞻の喪は至るも臨まず、晝夜兼道し而して進む。

■〔郗鑒は東の糧運を断つ作戰〕郗鑒は廣陵に在り、城は孤にして糧は少なく、胡寇の逼る近く、人は固志無し。詔書を得て、即ち流涕して衆に誓い、入りて國難に赴かんとし、將士は争いて奮う。將軍の夏侯長等を遣わして間行して溫嶠に謂って曰わしむ、

「或は聞くに賊は天子を挾みて東に會稽に入らんと欲すと、當に先ず營壘を立て、要害に屯據し、既に其の越逸を防ぎ、又た賊の糧運を断ち、然る後に野を清め壁を堅くし以て賊を待つべし。賊は城を攻めて拔かざれば、野には掠める所無く、東道は既に断え、糧運は自ら絶ち、必ず自潰せん矣。」

嶠は深く以て然りと為す。

■〔陶侃・庾亮・溫嶠は建康に向かう〕五月、陶侃は衆を帥いて尋陽に至る。議者は咸な謂えらく侃は庾亮を誅し以て天下に謝せんと欲すと。亮は甚だ懼れ、溫嶠の計を用い、侃に詣り拜謝す。侃は驚き、之を止めて曰く、

「庾元規（庾亮）は乃ち陶士行（陶侃）を拜する邪！」

亮は咎を引きて自ら責め、風止（風采）觀る可し、侃は覺えず釋然として、曰く、

「君侯は石頭（前卷咸和元年にあり）を修めて以て老子に擬す、今日反りて求め見る邪！」

即ち之と與に談り宴すこと終日、遂に亮、嶠と同じく建康に趣く。戎卒は四萬、旌旗は七百餘里、鉦鼓之聲は、遠近を震わす。

■蘇峻は西方に兵起るを聞き、參軍の賈寧の計を用い、姑孰より還りて石頭に據り、兵を分け以て侃等を拒ぐ。

■〔蘇峻は帝を石頭に移す〕乙未（18日）、峻は逼りて帝を石頭に遷す。司徒の導は固く争うも、従わず。帝は哀泣して車に升起、宮中は慟哭す。時に天は大雨、道路は泥濘となり、劉超、鍾雅は歩いて左右に侍す。峻は馬を給すれども、（劉超、鍾雅は）肯えて乗らず、而して悲哀慷慨す。峻は聞き而して之を惡み、然るに未だ敢えて殺さざる也。其の親信の許方等を以て司馬に補して殿中監を督せしめ、外は宿衛に托し、内は實に超等を防禦する。峻は倉屋を以て帝宮と為し、日々に帝の前に來たりて丑（続は醜）言を肆にする。劉超、鍾雅は右光祿大夫の荀崧、金紫光祿大夫の華恆、尚書の荀遂、侍中の丁潭と侍從して、帝

の側を離れず。時に饑饉なりて、米は貴く、峻の問遣は、超は一に受ける所無く、^{けんけん}繾綣（牢固にして相離れず、人情厚く情細やか）たる朝夕、臣節は愈々恭し。幽厄之中に居ると雖も、超は猶ほ帝に啟して、《孝經》、《論語》を授ける。

■峻は左光祿大夫の陸曄をして留台を守らしめ、居民を逼近し、盡く之を後苑に聚める。匡術をして苑城を守らしむ。

■尚書左丞の孔坦は陶侃に奔り、侃は以て長史と為す。

■〔王導は密かに義兵を募らせる〕初め、蘇峻は尚書の張闓を遣わし^{かり}權に東軍を督せしめ、司徒の導は密かに令して太后の詔を以て三吳（吳郡・吳興・會稽）の吏士に諭さしめて、義兵を起こして天子を救わしむ。會稽内史の王舒は庾冰を以て奮武將軍を行わしめ、兵一萬を將いて、西に浙江を渡らしむ。是に於いて吳興太守の虞潭、吳國內史の蔡謨、前義興太守の顧從等は皆な兵を擧げて之に應ず。潭の母の孫氏は譚に謂って曰く、

「汝は當に生を捨てて義を取り、吾の老いたるを以て^{わざわい}累と為す勿かれ！」（6-052p）
盡く一其の家僮を遣わして軍に従わしめ、其の環珮を^{ひさ}鬻ぎ以て軍資と為す。^{おもえ}謨以らく庾冰は當に舊任に還るべし、即ち郡を去りて以て冰に讓る。

■〔蘇峻の迎撃〕蘇峻は東方の兵起るを聞き、其の將の管商、張健、弘徽等を遣わして之を拒ましむ。虞潭等は與に戦い、互いに勝負有り、未だ^{すす}前むを得る能わず。

■〔毛寶は上陸禁止軍令に反して祖約の軍糧を奪取〕陶侃、溫嶠は茄子浦（江蘇省金陵道江寧縣城の西南の大勝関付近、揚子江南岸、現・南京市江寧区）に軍す。嶠は以えらく南兵（陶侃、溫嶠の兵）は水に習い、蘇峻の兵は歩に便うと、將士に令す、

「岸に上がる者有れば死せん！」
會々峻は米萬斛を送りて祖約に饋り、約は司馬の桓撫等を遣わして之を迎えしむ。毛寶は千人を帥いて嶠の前鋒と為り、其の衆に告げて曰く、
「兵法に『軍令も従わざる所有り』、豈に賊の撃つ可きを視て、岸に上がりて之を撃たざる可けん邪！」
乃ち^{ほしいまま}擅に往きて撫を襲い、悉く其の米を獲り、斬獲は萬を計り、約は是に由りて饑乏す。嶠は寶を表して廬江太守と為す。

■陶侃は王舒を表して浙東軍事を監ぜしめ、虞潭をして浙西軍事を監ぜしめ、郗鑒をして揚州八郡諸軍事を都督せしめ、舒、潭をして皆な鑒の節度を受け令む。鑒は衆を帥いて江を渡り、侃等と茄子浦に會し、雍州刺史の魏該も亦た兵を以て之に會す。

■〔蘇峻は望見して懼れる〕丙辰（39日?、五月閏月なら9日）、侃等の舟師は直ちに石頭を指し、蔡洲（金陵道江寧縣西の江中にあり、現・南京市江寧区）に至り、侃は查浦（江の南岸、秦淮河の口）に屯し、嶠は沙門浦に屯す。峻は烽火樓に登り、士衆之盛んなるを望見し、懼れる色有り、左右に謂って曰く、

「吾は本は溫嶠が能く衆を得るを知る也。」
■〔王彰は反って敗北〕庾亮は督護の王彰を遣わして峻の黨の張曜を撃ち、反って敗るる所と為る。亮は節傳を送りて侃に謝し、侃は答えて曰く、

「古人（魯の將の曹沫）は三敗し、君侯は始めて二なり。當今は事急なり、宜しく數々爾るべからず。」

亮の司馬の陳郡の殷融は侃に詣りて謝して曰く、

「將軍は此を為す、融等の裁する所に非らず。」

王彰は至りて曰く、

「彰は自ら之を為す、將軍は知らざる也。」

侃は曰く、

「昔殷融は君子^たり、王彰は小人^たり。今王彰は君子^たり、殷融は小人^たり。」

■ 「宣城桓彝の義の奮戦と戦死」 宣城内史の桓彝は、京城の守られずを聞き、慷慨流涕し、進みて涇縣（安徽省蕪湖道涇県、現・宣城市涇県）に屯す。時に州郡は多く遣使して蘇峻に降り、裨惠は復た彝に宜しく且く與に使いを通じ、以て交々至る（四面から蘇峻勢力に攻められる）之禍いを紓くするを勧める。彝は曰く、

「吾は國の厚恩を受け、義は死を致すに在り、焉^{いずく}ぞ能く恥を忍んで逆臣と問を通じんや！如し其の濟らざれば、此れ則ち命也。」

彝は將軍の俞縱^{ゆしゅう}を遣わして蘭石（涇県の東北）を守らしめ、峻は其の將の韓晃を遣わして之を攻めしむ。縱は將に敗れんとし、左右は縱に軍を退けるを勧める。縱は曰く、

「吾は桓侯の厚恩を受け、當に死を以て報ずるべし。吾之桓侯^{そむ}に負く可からざるは、猶ほ桓侯之國に負かざるがごとき也。」

遂に力戦し而して死す。晃は進軍して彝を攻め、六月、城は陷ち、彝を執り、之を殺す。

■ 「陶侃は白石壘を築き時間稼ぎ」 諸軍は初めて石頭に至り、即ち決戦せんと欲し、陶侃は曰く、

「賊衆は方に盛んなり、(6-053p) 與に鋒を争うは難し、當に歲月、智計を以て之を破らん。」

既に而して屢々戦いて功無し、監軍（胡三省曰く、この時同盟諸將に軍事を監する者無し、李根は郗鑒の武將なので、鑒の軍の誤りではと）部將の李根は白石壘（石頭の東北）を築かんと請い、侃は之に従う。夜壘を築き、曉に至り而して成る。峻の軍の嚴聲（鼓を打ち隊を嚴にする）を聞き、諸將は咸な其の來攻を懼れる。孔坦は曰く、

「然らず。若し峻が壘を攻めれば、必ず東北の風急なるを須ち、我が水軍をして往きて救うを得ざら令めん。今日は清靜にして、賊は必ず來たらず。嚴する所以の者は、必ず軍を遣わして江乗に出で、京口以東を掠めん矣。」

已に而して果たして然り。侃は庾亮をして二千人を以て白石を守ら使め、峻は步騎萬餘を帥いて四面より之を攻め、克たず。

■ 「京口への陽動作戦」 王舒、虞潭等は數々峻の兵と戦い、利あらず。孔坦は曰く、

「本郗公^べを召す須からず、遂に東門をして限り無から使む。今宜しく遣り還すべし、晚きと雖も、猶ほしからずに勝る也。」

侃は乃ち鑒をして後將軍の郭默と還りて京口に據ら令め、大業、曲阿、陵亭の三壘（江蘇省金陵道丹陽県にあり、現・鎮江市丹陽市）を立て以て峻之兵の勢いを分け、郭默をして大業を守ら使む。

■ 壬辰（元嘉曆七月なら15日）、魏該（?-328、本貫は東郡東阿県。魏浚の族子）は卒す。

■ 「淝口での毛寶の奮戦」 祖約は祖渙、桓撫を遣わして淝口（潯陽道德化県、現・九江市柴桑区）を襲わしむ。陶侃は之を聞き、將に自ら之を撃たんとす。毛寶は曰く、

「義軍は公を恃む、公は動く可からず、寶は請いて之を討たん。」

侃は之に従う。渙、撫は皖（春秋時代の国名、大別山地の霍山より北東に延びる丘、漢代安徽省潜山県、現・安慶市潜山市）を過ぎ、因りて譙國內史の桓宣（皖の馬頭山に屯す）を攻める。寶は往きて之を救い、渙、撫の敗るる所と為る。

箭は寶の髀^{もも}を貫き、鞍に徹し、寶は人をして鞍を蹋みて箭を抜か使め、血は流れて靴を満たす。還りて渙、撫を撃ち、破りて之を走らせ、宣は乃ち出で、温嶠に歸するを得る。寶は進みて祖約の軍を東關に攻め、合肥の戍を抜き、嶠に會して之を召し、（寶は）復た石頭に歸る。

■ 「祖約諸將の内応で後趙は壽春を落とす」 祖約の諸將は陰かに後趙と通謀し、内應を為すを許す。後趙

の將の石聰、石堪は兵を引いて淮を濟り、壽春を攻める。秋、七月、約の衆は潰え、歷陽に奔り、聰等は壽春の二萬餘戸を虜とし而して歸る。

後趙 **〔石虎は前趙の河東攻略失敗、劉曜は洛陽に迫る〕** 後趙の中山公の虎は衆四萬を帥いて軹關（河内の軹県にあり、河南省河北道淇源縣の西北、現・濟源市）より西に入り、趙の河東を撃つ。之に應じる者は五十餘縣、遂に進みて蒲阪を攻める。趙主の曜は河間王の述を遣わして氐、羌之衆を發して秦州に屯せしめ以て張駿、楊難敵に備え、自ら中外の精銳水陸諸軍を將いて以て蒲阪を救い、衛關（汲郡汲県にあり、河南省河北道汲県、現・新郷市衛輝市）より北に濟る。虎は懼れ、引いて退く。曜は之を追い、八月、高侯（山西省河東道聞喜縣の北に高侯原、現・運城市聞喜縣）に及び、虎と戦い、大いに之を破り、石瞻を斬る。屍の枕すは二百餘里、其の資仗を收めること億計り、虎は朝歌（河南省河北道淇縣、現・鶴壁市淇縣）に奔る。曜は大陽（山西省河東道平陸縣の南二里に大陽渡あり、現・運城市平陸縣）より（黄河を）濟り、石生を金墉に攻め、千金竭を決して以て之に灌ぐ。諸將を分遣して汲郡、河内を攻め、後趙の滎陽太守の尹矩、(6-054p) 野王（漢以来河内郡に属し、後趙初めて野王郡を置く、河南省河北道泌陽縣、現・焦作市沁陽市）太守の張進等は皆な之に降る。襄國は大いに震う。

前凉 **〔張駿は長安を襲わんとするも断念〕** 張駿は兵を治め、虚に乗りて長安を襲わんと欲す。理曹郎中（張氏の官、刑獄を掌る）の索詢は諫めて曰く、

「劉曜は東征すると雖も、其の子の胤は長安を守り、未だ輕んずるに易からざる也。借に小さく獲る所有ら使むるとも、彼が若し東方之^{はかりごと}圖^すを釋て、還りて我と校せば、禍難之期は、未だ量る可からざる也」駿は乃ち止む。

■ **〔路永等蘇峻腹心と王導は白石に奔る〕** 蘇峻の腹心の路永、匡術、賈寧は祖約の敗れるを聞き、事の濟さざるを恐れ、峻に勧めるに、

「盡く司徒の導等の諸大臣を誅し、更めて腹心を樹てるべし」

峻は雅より導を敬い、許さず。永等は更に峻に貳（心）あり、導は參軍の袁耽をして潜かに永に歸順を誘わ使む。九月、戊申（3日）、導は二子を攜えて永と與に皆な白石に奔る。耽は、渙（曹操に事える）之曾孫也。

■ **〔蘇峻はまだ強し〕** 陶侃、溫嶠等は蘇峻と久しく相い持ちて決せず、峻は諸將を分遣して東西に攻掠せしめ、向かう所多く捷ち、人の情心（続は人情）は匈懼す。朝士之西軍に奔る者は皆な曰く、

「峻は狡黠^{こうかつ}にして膽決（膽勇決断）有り、其の徒は驍勇にして、向かう所敵無し。若し天罪有るを討てば、則ち峻は終に滅亡せん。止だ人事を以て之を言え、未だ除くは易からざる也。」

溫嶠は怒りて曰く、

「諸君は怯懦^{きようだ}にして、乃ち更に賊を譽めるや！」

累^{しきり}に戦いて勝たざるに及び、嶠も亦た之を憚る。

■ **〔溫嶠の言はよく陶侃を留める〕** 嶠の軍の食は盡き、陶侃に貸る。侃は怒りて曰く、

「使君は前に雲うに、良將及び兵食無きを憂えず、惟だ老僕を得て主と為さんと欲する耳。今數々戦いて皆な北にいく（逃げるの意味）、良將は安くに在るや！荊州は胡、蜀の二虜に接し、當に不虞に備えるべし。若し復た食無ければ、僕は便ち西に歸り、更に良算を思わん。徐ろに來たりて賊を殄^たたんと欲す、晩^{おそ}しと為さざる也。」

嶠は曰く、

「凡そ師の克つは和に在り、古之善き教え也。光武之昆陽を濟すくい (39 卷漢淮陽王更始元年に見える)、曹公之官渡を抜くは (63 卷漢獻帝建安五年の見える)、寡を以て衆に敵す、義に杖る故也。峻、約は小豎にして、凶逆天に滔はびこる、何ぞ滅びざるを憂えんや！峻は驟々勝ち而して驕り、自ら謂うに前無し、今之に挑みて戦えば、一鼓し而して擒となす可き也。奈何して立つに垂々とする之功を捨てて、進退之計を設ける乎！且つ天子は幽逼し、社稷は危殆なり、乃ち四海の臣子の肝腦は地を塗る之日なり。嶠等は公と並びて國の恩を受け、事若し克ちを濟せば、則ち臣主は祚さいわいを同じくす。如し其の捷たざれば、當に身を灰にして以て先帝に謝する耳。今之事勢は、義は踵きびすを旋めぐらす無く、譬えば騎虎の如し、安んぞ中に下る可けん哉！公が若し衆に違いて獨り返せば、人心は必ず沮まん。衆を沮み事に敗れば、義の旗は將に回りに公に指ささんとす矣。」(この言が陶侃に大功を成さしめた)

毛寶は嶠に言つて曰く、

「下官は能く陶公を留めん。」

乃ち往きて侃を説いて曰く、

「公は本々應に蕪湖に鎮し、南北の勢援を為し、前に既に已に下り、勢いは還る可からず。且つ軍政は進む有りて退く無し、直ちに三軍を整齊するのみに非ず、衆に必死を示し而して已む、亦た謂うに退きて據る所無し、終に滅亡に至るべし。往者ききに杜弢 (89 卷愍帝建康三年) は強盛ならざるに非ず、(6-055p) 公は竟に之を滅ぼす、何の峻に至りて、獨り破る可からざる邪！賊も亦た死を畏れ、皆な勇健に非ず、公は試みに寶に兵を與え、岸に上りて賊の資糧を斷た使む可し。若し寶が效を立てざれば、然る後に公は去れば、人心は恨まず矣。」

侃は之を然りとし、寶に督護を加え而して之を遣る。竟陵 (惠帝の元康九年に江夏の西界を分けて竟陵郡を置く) 太守の李陽は侃を説いて曰く、

「今大事が若し濟らざれば、公は粟有りと雖も、安んぞ得て而して諸を食わんや！」

侃は乃ち米五萬石を分けて以て嶠の軍に餉とす。毛寶は峻の句容 (江蘇省金陵道句容県、現・鎮江市句容市)、湖孰 (江蘇省金陵道江寧県の東南、現・南京市江寧区) の積聚を焼き、峻の軍は食乏しく、侃は遂に留まりて去らず。

■ [大業を攻められ京口は動揺] 張健、韓晃等は急に大業を攻める。壘中は水に乏しく、人は糞汁を飲む。郭默は懼れ、潜かに圍いを突いて外に出て、兵を留めて之を守らしむ。郗鑒は京口に在り、軍士は之を聞きて皆な色を失う。參軍の曹納は曰く、

「大業は、京口之扞蔽 (防ぎ蔽う、防衛のキモ) 也、一旦守らざれば、則ち賊兵は徑ちに至り、當る可からざる也。請う廣陵に還り、以て後舉を俟たん。」

鑒は大いに僚佐を會し、納を責めて曰く、

「吾は先帝の顧托之重きを受け、正に復た軀を九泉に捐て、報塞 (恩に報じ責を塞ぐ) に足らず。今強寇は近くに在り、衆心は危逼し、君は腹心之佐なり、而も異端を生長し、當に何を以て義衆に帥先し、三軍を鎮壹すべけん邪！」

將に之を斬らんとし、久しく乃ち釋すを得る。

■ [殷羨は石頭を攻めるを提案] 陶侃は將に大業を救わんとし、長史の殷羨は曰く、

「吾が兵は歩戦を習わず、大業を救い而して捷たざれば、則ち大事は去る矣。急に石頭を攻めるに如かず、則ち大業は自ら解かん。」

侃は之に従う。羨は、融之兄也。

■ [蘇峻は酔いに乗じ、馬躓きてあえなく死す] 庚午 (25 日)、侃は水軍を督して石頭に向かう。庾亮、

溫嶠、趙胤は歩兵萬人を帥いて白石より南に上り、挑戦せんと欲す。峻は八千人を將いて逆え戦い、其の子の碩及び其の將の匡孝を遣わして兵を分けて先ず趙胤の軍に薄し、之を敗る。峻は方に其の將士を勞し、酔いに乗じて胤が走るを望見して、曰く、

「孝は能く賊を破る、我は更に如かざらん邪！」

因りて其の衆を捨て、數騎と與に北に下り陳を突く、入るを得ず、將に回りにて白木陂（東陵の東）に趨かんとす。馬は躓^{つまづ}き、侃の部將の彭世、李千等は之に投げるに矛を以てし、峻は馬より墜ちる。首を斬り、之を斃^{れんかつ}割し、其の骨を焚き、三軍は皆な萬歳を稱す。餘衆は大いに潰える。峻の司馬の任讓等は共に峻の弟の逸を立てて主と為し、閉城して自ら守る。溫嶠は乃ち行台を立て、遠近に佈告し、凡そ故吏の二千石以下は、皆な台に赴か令む、是に於いて至る者は雲集す。韓晃は峻の死を聞き、兵を引いて石頭に趣く。管商、弘徽は虔亭壘を攻め、督護の李閔、輕車長史の滕含は撃ちて之を破る。含は、修之孫也。商は走りて庾亮に詣りて降り、餘衆は皆な張健に歸す。

【石勒は劉曜を洛陽に破り、擒にして殺す】

後趙〔石勒は迎撃の一戦に賭ける〕冬，十一月，後趙王の勒は自ら將いて洛陽を救わんと欲し、僚佐の程遐等は固く諫めて曰く、

「劉曜は懸軍千里、勢いは久しきを支えず。大王は宜しく親ら動くべからず、動けば萬全は無し。」

（6-056p）勒は大いに怒り、劍を按じて遐等を叱りて出でしめる。乃ち徐光（前卷咸和元年に捕らえられる）を赦し、召し而して之に謂いて曰く、

「劉曜は一戦之勝ちに乗り、洛陽を圍み守り、庸人（一般人、常人、凡人）之情は皆な其の鋒を謂うに當たる可からずと。曜は帶甲十萬、一城を攻め而も百日克たず、帥は老い卒は怠り、我が初めの銳を以て之を撃てば、一戦に而して擒とする可き也。若し洛陽の守らざれば、曜は必ず死を冀州（石勒は冀州の襄國に都す）に送らん、河より已北、席捲し而して來れば、吾が事は去らん矣。程遐等は吾が行くを欲せず、卿は以て何如と為すや？」

對えて曰く、

「劉曜は高侯之勢いに乗り、進みて襄國に臨む能わず、更に金墉を守り、此くは其の能く為す無きを知る可き也。大王の威略を以て之に臨めば、彼は必ず旗を望みて奔敗せん。天下を平定するは、今の一舉に在り、失う可からざる也。」

勒は笑いて曰く、

「光の言は是也。」

乃ち内外をして戒嚴せ使め、

「諫める有る者は斬らん」

と。石堪、石聰及び豫州刺史の桃豹等に命じて各々見衆を統べて滎陽に會せしむ。中山公の虎は進みて石門（河南省開封道滎澤県、現・鄭州市滎陽市）に據り、勒は自ら歩騎四萬を統べて金墉に趣き、大堙（河南省河北道延津県、現・新郷市延津県）より濟る。勒は徐光に謂って曰く、

「曜は兵を成皋關（現・鄭州市滎陽市汜水鎮西北）に盛んにすれば、上策也。洛水を阻めば、其の次也。坐して洛陽を守るは、此れ擒と成る耳。」

十二月，乙亥（1日）、後趙の諸軍は成皋に集まること、歩卒六萬、騎二萬七千なり。勒は趙に守兵無きを見、大いに喜び、手を舉げて天を指し、復た額に加えて、曰く、

「天也！」

甲を巻き枚を銜んで、詭道より兼行し、鞏（河南省河洛道鞏県、現・鄭州市鞏義市）、訾（訾城は鞏県の西南）之間に出る。

前趙 **〔包囲中に飲酒賭博する劉曜は慌てて囲みを解く〕** 趙主の曜は専ら嬖臣と飲み博し、士卒を撫せず。左右は或は諫め、曜は怒り、妖言を為すを以て、之を斬る。勒の已に河を濟るを聞き、始めて滎陽の戍を増し、黃馬關（河南省開封道汜水県、現・鄭州市滎陽市汜水鎮）を杜がんと議す。俄に而して洛水の侯者は後趙の前鋒と交戦し、羯（石勒の民族）を擒として之を送る。曜は問いて、

「大胡（石勒）は自ら來たる邪？其の衆は幾何か？」

羯は曰く、

「王は自ら來たる、軍勢は甚だ盛んなり。」

曜の色は變わり、金墉之圍みを攝ら使めて、洛西に陳ずること、衆は十餘萬、南北に十餘里なり。勒は望見し、益々喜び、左右に謂って曰く：

「以て我を賀す可き矣！」

勒は歩騎四萬を帥いて洛陽城に入る。

後趙 **〔酩酊した劉曜を石虎の軍は捕虜にし大勝〕** 己卯（5日）、中山公の虎は歩卒三萬を引いて城北より而して西し、趙の中軍を攻め、石堪、石聰等は各々精騎八千を以て城西より而して北し、趙の前鋒を撃ち、大いに西陽門（洛陽城の西面南頭の第一門）に於いて戦う。勒は躬ら甲冑を貫き、閶闔門（洛陽城の西面）より出で、之を夾撃す。曜は少く而して酒を嗜み、末年は尤も甚し。將に戦わんとし、酒を飲むこと數斗。常に乗る赤馬は故無くして停頓（続は踟頓、足が彎曲し首は下がり）し、乃ち小馬に乗る。出でる比おい、復た飲酒して斗餘。西陽門に至り、陳を揮^{さしまね}きて平（平地）に就かんとす。石堪は因り而して之に乗じ、趙兵は大いに潰ゆ。曜は昏醉して退き走り、馬は石渠に陥ち、冰上に墜ち、被瘡は十餘にして、通りて中たる者は三、堪の執る所と為る。**(6-057p)** 勒は遂に大いに趙兵を破り、斬首は五萬餘級。下令して曰く、

「擒にせんと欲する所の者一人耳、今已に之を獲る。其れ將士に敕して鋒を抑え銳を止め、其の命に歸する之路を^{ほしいまま}縦にすべし。」

前趙 **〔太子熙に社稷を保つを敕し、遂に劉曜は殺される〕** 曜は勒に見みえ、曰く、

「石王は、頗る重門（城名、河南省河北道輝県、現・新郷市輝県市）之盟（懷帝の永嘉四年に同じく河内を囲む時の盟）を憶（記憶）するや否や？」

勒は徐光をして之に謂って曰わ使め、

「今日之事は、天は其れをして然ら^{しか}使めるなり、復た何を雲う邪！」

乙酉（11日）、勒は師を班^{かえ}す。征東將軍の石邃をして兵を將いて曜を衛送せ使む。邃は、虎之子也。曜の瘡は甚しく、載せるに馬輿を以てし、醫の李永をして與に同じく載ら使む。己亥（22日）、襄國に至り、曜を永豐の小城に捨（続は舍）し、其の妓妾を給し、兵を嚴にして圍み守る。劉岳（擒になるは前卷明帝太寧三年）、劉震等を遣わし男女を從え盛服して以て之に見えしめ、曜は曰く、

「吾は謂うに卿等は久しく灰土と為り、石王は仁厚く、乃ち全宥して今に至る邪！我は石佗（前卷太寧三年）を殺し、之を愧じること多し矣。今日之禍は、自ら其の分なる耳。」

留まりて宴すること終日而して去る。勒は曜をして其の太子の熙に書を與え使め、諭して速かに降ら令めんとす。曜は但だ熙に敕す、

「諸大臣と與に社稷を匡維し、吾を以て意を易える勿かれ也。」

勅は見て而して之を惡み、之久しくして、乃ち曜を殺す。

成漢是の歲、成漢の獻王の**驤**（成は漢王と為す）は卒し、其の子の征東將軍の**壽**は喪を以て成都に還る。成主の**雄**は**李旡**を以て征北將軍、梁州刺史と為し、**壽**に代わりて晉**壽**に屯ぜしむ。

顯宗成皇帝上之下咸和四年（己丑、329年）

■ **〔苑城は西軍に附く〕** **春、正月**、光祿大夫の**陸曄**及び弟の尚書左僕射の**玩**は**匡術**を説き、苑城を以て西軍に附ける。百官は皆な之に赴き、**曄**を推して宮城の軍事を督せしむ。**陶侃**は**毛寶**に命じて（苑城の）南城を守らしめ、**鄧岳**に（苑城の）西城を守らしむ。

■ **〔任讓は心を尽くして華恆を救う〕** 右衛將軍の**齊超**、侍中の**鐘雅**は建康令の**管旆**等と帝を奉じて出でて西軍に赴かんと謀る。事は洩れ、**蘇逸**は其の將の平原の**任讓**をして兵を將いて宮に入りて**超**、**雅**を収め使む。帝は抱き持ちて悲泣して曰く、

「我に侍中、右衛を還せ！」

讓は奪い而して之を殺す。初め、**讓**は少くして行い無し、太常の**華恆**（平原の高唐の人）は本州の大中正と為り、其の品を黜ける。**讓**が**蘇峻**の將と為るに及び、勢いに乗りて誅殺する所多し。**恆**を見れば輒ち恭敬にして、敢えて暴を**縱**^{ほしいまま}にせず。**鐘**、**劉**之死するに及び、**蘇逸**は並せて**恆**を殺さんと欲し、**讓**は心を盡くして救い衛り、**恆**は乃ち免かるるを得たり。

■ **〔歴陽の祖約は後趙に奔る〕** 冠軍將軍の**趙胤**は部將の**甘苗**を遣わして祖約を歴陽に撃たしめ、戊辰（25日）、約は夜左右數百人を帥いて後趙に奔り、其の將の**牽騰**は衆を帥いて出で降る。

■ **〔台城の攻防、毛寶の機知〕** **蘇逸**、**蘇碩**、**韓晃**は力を并せて台城を攻め、太極東堂及び秘閣を焚き、**毛寶**は城に登り、數十人を射殺す。**晃**は**寶**に謂って曰く、

「君は勇果に名あり、何ぞ出でて闘わざる？」

寶は曰く、（6-058p）

「君は健將に名あり、何ぞ入りて闘わざる？」

晃は笑い而して退く。

前趙 **〔劉熙は上邽に奔り、長安は後趙に降る〕** 趙の太子の**熙**は趙主の**曜**の擒にせ被れるを聞き、大いに懼れ、南陽王の**胤**と西に秦州を保つを謀る。尚書の**胡勳**は曰く、

「今君を喪うと雖も、境土は尚ほ完くし、將士は叛せず、且く當に力を并せて之を拒むべし。力は拒む能わざれば、走るとも未だ晩からざる也。」

胤は怒り、以て衆を沮むと為し、之を斬り、遂に百官を帥いて上邽（甘肅省渭川道天水県、現・天水市秦州区、清水県）に奔り、諸々の征鎮は亦た皆な守る所を棄てて之に従い、關中は大いに亂れる。將軍の**蔣英**、**辛恕**は衆數十萬を擁して長安に據り、遣使して後趙に降り、後趙は**石生**を遣わして洛陽之衆を帥いて之に赴く。

【陶侃ら西軍の勝利】

■ **〔皇帝は遂に西軍に渡る〕** **二月**、丙戌（13日）、諸軍は石頭を攻める。建成長史の**滕含**は**蘇逸**を撃ち、大いに之を破る。**蘇碩**は驍勇數百を帥いて、淮（建康の秦淮河）を渡り而して戦い、**溫嶠**は撃ちて之を斬る。**韓晃**等は懼れ、其の衆を以て曲阿に**張健**に就かんとし、門は隘く出るを得ず、更に相い蹈藉し、死者は萬

を数える。西軍は蘇逸を獲り、之を斬る。膝含の部將の曹據は帝を抱きて溫嶠の船に奔り、群臣は帝に見え、頓首し號泣して罪を請う。西陽王の業（蘇峻に付くこと咸和三年に見える）、並びに其の二子の播、充、孫の崧及び彭城王の雄（蘇峻に付くこと前卷二年に見える）を殺す。陶侃は任讓と舊有り、為に其の死を（赦さんことを）請う。帝は曰く、

「是れ吾が侍中、右衛を殺す者なり、赦す可からざる也。」

乃ち之を殺す。司徒の導は石頭に入り、故の節（王導は王敦を討つ時より節を假り、其の石頭より出て奔る時に棄てる）を取ら使め、陶侃は笑いて曰く、

「蘇武の節は是くの如くならざるに似たり。」

導は慚じる色（導は陶侃に譏られ自らその節を失うを恥じる）有り。丁亥（14日）、大赦す。

■ 〔郗鑒らは張健らを討伐〕張健は弘微等が己に貳（心）あるを疑い、皆な之を殺し、舟師を帥いて延陵（江蘇省金陵道丹陽県の南三十里、現・鎮江市丹陽市）より將に吳興に入らんとす。乙未（22日）、揚烈將軍の王允之は與に戦い、大いに之を破り、男女萬餘口を獲る。健は復た韓晃、馬雄等と輕軍にて西に故鄣（吳興の県、浙江省錢塘道安吉県の西北十五里、現・湖州市安吉県）に趨き、郗鑒は參軍の李閔を遣わして之を追わしめ、平陵山（江蘇省金陵道溧陽県、現・常州市溧陽市）に及び、皆な之を斬る。

■ 〔遷都の論議止む〕是の時宮闕は灰燼し、建平園を以て宮と為す。溫嶠は都を豫章に遷さんと欲し、三吳之豪は會稽に都するを請い、二論は紛紜として未だ決せず。司徒の導は曰く、

「孫仲謀（孫權の字、66 卷漢獻帝建安 17 年にあり）、劉玄德は俱に言う、『建康は、王者之宅なり。』古之帝王は、必ずしも豐儉を以て都を移さず。苟くも本を務め用を節すれば、何の凋弊（疲れ衰える）を憂えるや！若し農事の修まらざれば、則ち樂土も墟と為る矣。且つ北寇は遊魂（彷徨う靈魂）のように、我之隙を伺い、一旦弱きを示せば、蠻越に竄し、之に望實（声望実力）を求め、懼らくは良計に非ざるなり。今特に宜しく之を鎮めるに靜を以て、群情は自ら安からん。」

是に由りて復た都を徙さず。褚裒を以て丹楊尹と為す。時に兵火之後に、民物は凋殘し、裒は散亡を收集し、京邑は遂に安ず。（6-059p）

壬寅（29日）、湘州を以て荊州に并せる。（湘州を分ける事は 86 卷懷帝永嘉元年にあり）

■ 〔蘇峻討伐の論功行賞〕三月，壬子（10日）、蘇峻を平らげるの功を論じ、陶侃を以て侍中、太尉と為し、長沙郡公に封じ、都督交、廣、寧州諸軍事（先に荆襄雍梁の四州を都督す）を加える。郗鑒を侍中、司空、南昌縣公と為す。溫嶠を驃騎將軍、開府儀同三司と為し、散騎常侍、始安郡公を加える。陸曄を進めて江陵公に爵す。自餘の爵侯、伯、子、男を賜わる者は甚だ衆し。卞壺及び二子の胗、盱、桓彝（桓温の父、276-328）、劉超、鍾雅、羊曼、陶瞻には、皆な贈諡を加える。路永、匡術、賈寧は、皆な蘇峻之黨也。峻の未だ敗れず、永等は峻を去りて朝廷に歸し、王導は賞するに官爵を以てするを欲す。溫嶠は曰く、

「永等は皆な峻之腹心なり、首として亂階を為し、罪は焉より大なるは莫し。晩く改悟すると雖も、未だ以て前罪を贖うに足らず；首領を全くするを得れば、幸い為ること多き矣、豈んぞ可復た之を褒寵する可けん哉！」

導は乃ち止む。

■ 〔陶侃・溫嶠は任地に帰還〕陶侃は江陵の偏遠なるを以て、移りて巴陵（建昌郡県名、湖南省武陵道岳陽県、現・岳陽市岳陽県）に鎮す。朝議は溫嶠を留めて政を輔けるを欲するも、嶠は王導が先帝の任ずる所を以て、固辭して藩に還る。又た京邑の荒殘、資用の給せざるを以て、乃ち資蓄を留め、器用を具え、而る後に武昌に旋す。

■ 【庾亮は混乱の責任を取って外出す】 帝之石頭に出る也、庾亮は帝に見え、稽顙（^{けいそう} 立ったまま拝礼）して哽咽（涙にむせぶ）し、亮に詔して大臣と俱に御座に升らしむ。明くる日、亮は復た泥首して謝罪し、骸骨を乞い、闔門（一族全部）は山海に投竄するを欲す。帝は尚書、侍中を遣わして詔して慰喻して曰く、
「此れは社稷之難なり、舅之責に非ざる也。」

亮は上疏して自ら陳ず、

「祖約、蘇峻の凶逆を縱肆（^{じゅうし} ほしいままに連ねる）するは、罪は臣に由りて發す、寸斬屠戮されるとも、以て七廟之靈に謝し、四海之責を塞ぐに足らず。朝廷は復た何の理ありてか臣を人次に齒（^{よわい}）せん、臣は亦た何の顔ありてか自ら人理に次せん！願はくは陛下は寛宥を垂れて、其の首領を全くすと雖も、猶ほ宜しく之を棄て、其の自ら存し自ら没するに任じれば、則ち天下は粗（^は）ぼ戒を勧める之綱を知らん矣。」

優詔して許さず。亮は又た山海に遁逃して、暨陽（^{きやう} 県名、江蘇省蘇常道江陰県、現・無錫市江陰市）より東に出んと欲す。有司に詔して舟船を録奪せしむ。亮は乃ち外鎮を求めて自ら效さんとし、出でて都督豫州、揚州之江西（盧江・弋陽・安豊・歷陽等の郡）、宣城（揚州に属す）諸軍事、豫州刺史と為り、宣城内史を領し、蕪湖に鎮す。

■ 【王導は騒乱後にて卞敦を罰せず】 陶侃、溫嶠之蘇峻を討つ也、檄を征、鎮に移し、各々兵を引いて入り援け使む。湘州（陶侃の督する地にあり）刺史の益陽侯の卞敦は兵を擁して赴かず、又た軍糧を給せず、督護を遣わして數百人を將いて大軍に隨わし而して已む、朝野は怪しみ歎ぜざる莫し。峻の平らぐに及び、陶侃は奏す、

「敦は軍を阻みて、顧望し國難に赴かず、請うに檻車にて廷尉に收め付くべし。」

王導は以て、

「喪亂之後なり、宜しく寛宥を加えるべし」

敦を轉じて安南將軍、廣州刺史とす。病にて赴かず、征して光祿大夫と為し、少府を領せしむ。敦は憂愧して而して卒す、追いて本官を贈り、(6-060p) 散騎常侍を加え、諡して敬と曰う。

■ 【本当の罪は誰に有るや】 臣光は曰く、「庾亮は外戚を以て輔政し、首として禍いの機を發し、國破れて君危うく、身を竄（^{のが}）れて苟くも免る。卞敦は位は方鎮に列し、兵糧俱に足り、朝廷顛覆して、坐して勝負を觀る。人臣之罪は、孰れか此より大ならん！既に明らかに典刑（定法、典型）を正す能わず、又た寵祿を以て之に報いる、晉室に政無し、亦た知る可し矣。是の責めに任ずる者は、豈に王導に非ざる乎！

■ 高密王の紘を徙して彭城王と為す。紘は、雄之弟也。

■ 【溫嶠は卒し、劉胤の処遇に苦慮】 夏，四月，乙未（23日），始安の忠武公の溫嶠は卒し、豫章に葬す。朝廷は之が為に大墓を元、明二帝陵之北に造らんと欲し、太尉の侃は上表して曰く、

「嶠の忠誠は聖世（^{あら}）に著われ、勳義は人神を感ず。亡し而して知る有ら使めれば、豈に今日の勞費之事を樂しまんや！願はくは陛下は慈恩、其の移葬を停めよ。」

詔して之に従う。平南（溫嶠は平南將軍）軍司の劉胤を以て江州刺史と為す。陶侃、郗鑒は皆な言う、

「胤は方伯の才に非らず」

司徒の導は従わず。或は導の子の悦に謂って曰く、

「今大難之後にして、紀綱は弛頓（緩め乱れる）す。江陵より建康に至る三千餘里、流民は萬計、布きて江州に在り。江州は、國之南籬、要害之地なり、而るに胤は怙侈（奢侈）之性を以て、臥し而して之に對せば、外變有らざれば、必ず内患有らん矣。」

悦は曰く、

「此れ溫平南（溫嶠）之意也。」

【前趙滅亡】

前趙 **〔前趙は上邽に亡び、蒲洪・姚弋仲は石虎に降る〕** **秋，八月**，趙の南陽王の**胤**は衆數萬を帥いて上邽より長安に趣き，隴東、武都、安定、新平、北地、扶風、始平の諸郡の戎、夏は皆な兵を起こして之に應じる。**胤**は仲橋（陝西省關中道禮泉県、現・咸陽市礼泉県）に軍す。**石生**は城を嬰して自ら守り，後趙の中山公の**虎**は騎二萬を帥いて之を救う。**九月**，**虎**は大いに趙兵を義渠（甘肅省涇原道會寧県の西北、現・白銀市会寧県）に破り，**胤**は奔りて上邽に還る。**虎**は勝ちに乗りて追撃し，屍は千里に枕す。上邽は潰え，**虎**は趙の太子の**熙**（劉淵り三世 27 年で滅亡）、南陽王の**胤**及び其の將王公卿校以下三千餘人を執り，皆な之を殺し，其の台省の文武、關東の流民、秦雍の大族九千餘人を襄國に徙す。又た五郡の屠各（匈奴の五部、前趙の属類）五千餘人を洛陽に坑す。進みて集木且羌（種落の名）を河西に攻め，之に克ち，俘獲は數萬，秦、隴悉く平らげる。氐王の**蒲洪**、羌酋の**姚弋仲**は俱に**虎**に降る，**虎**は**洪**を表して六夷の軍事を監ぜしめ，**弋仲**を六夷の左都督と為す。氐、羌の十五萬落を司、冀州に徙す。

乞伏氏 **〔乞伏司繁立つ〕** 初め，隴西の鮮卑の**乞伏述延**は苑川（甘肅省蘭山道金県、現・蘭州市榆中県）に居り，鄰部を侵し並せ，土馬は強盛なり。趙の亡びるに及び，**述延**は懼れ，麥田（甘肅省涇原道の北界）に遷る。**述延**は卒し，子の**辱大寒**は立つ。**辱大寒**は卒し，子の**司繁**は立つ。

【郭默の陰謀と展開】

■ **〔郭默は江州刺史の劉胤を誅殺す〕** 江州刺史の**劉胤**は矜豪にして日々甚しく，専ら商販を務め，殖財は百萬，(6-061p) 酒を縦にして耽樂し，政事を恤えず。**冬，十二月**，詔して後將軍の**郭默**を征して右軍將軍と為す。**默**は邊將^{へん}為るを楽しみ，宿衛を顧わず，情を以て**胤**に訴える。**胤**は曰く、
「此くは小人（晉の時代に文武の士は自らを称す）之及ぶ所に非らざる也。」

默は將に召しに赴かんとし，資を**胤**に求め，**胤**は與えず，**默**は是に由りて**胤**を怨む。**胤**の長史の**張滿**等は素より**默**を輕んじ，或は裸露（裸體露頂）して之を見，**默**は常に切齒す。臘日（大晦日），**胤**は**默**に豚酒^{おぐ}を餉り，**默**は信（使者）に對して之を水中に投げる。會々有司は奏す、

「今朝廷は空竭し，百官は祿無し，惟だ江州の運漕に資る，而るに**胤**は商旅路に繼ぎ，私を以て公を廢す，**胤**の官を免じるを請う。」

書下り，**胤**は即ち罪に歸せず，方に自ら申理（審理）す。僑人（寄寓者）の**蓋肫**^{こうとん}は人の女を掠めて妻と為し，**張滿**は其の家に還さめんとするに，**肫**は從わず，而して**郭默**に謂って曰く、

「**劉江州**（**劉胤**）は免を受けず（官を免ずるの命を受けず），密かに異圖有り，**張滿**等と日夜計議し，惟だ**郭侯**一人を忌み，先ず之を除かんと欲す。」

默は以て然りと為し，其の徒を帥い旦に門開くを候い**胤**を襲う。**胤**の將吏は**默**を拒まんと欲し，**默**は之に呵して曰く、

「我は詔を被り討つ所有り，動く者は三族を誅せん！」

遂に入りて内寢に至り，**胤**を牽きて下り，之を斬る。出でて，**胤**の僚佐の**張滿**等を取り，誣ふるに大逆を以てし，悉く之を斬る。**胤**の首を京師に傳え，詐りて詔書を作り，内外に宣示す。**胤**の女及び諸妾を掠め金寶を并せて船に還り，初めに

「都に下らん」

と雲い，既に而して**胤**の故府に停まる。譙國內史の**桓宣**（去年より溫嶠に歸して武昌に鎮す）を招引するも，**宣**は固く守りて從わず。

代 **〔什翼犍は趙の質となる〕** 是の歲、賀蘭部（拓跋翳槐を擁護すること前卷咸和二年に見える）及び諸大人は共に**拓跋翳槐**を立てて代王と為し、代王の**紇那**は宇文部に奔る。**翳槐**は其の弟の**什翼犍**を遣わして趙に質とし以て和を請う。

吐谷渾 **〔吐谷渾の名前の由来〕** 河南王の**吐延**は、雄勇にして猜忌多く、羌酋の**姜聰**は之を刺す。**吐延**は劍を抽かず、其の將の**紇圻泥**を召し、其の子の**葉延**を輔け、白蘭（青海の西南、羌の別種が居る）に保せ使め、劍を抽きて而して死す。**葉延**は孝に而して學を好み、以為らく禮に、公孫之子は王父（祖父）の字を以て氏と為すを得ると、乃ち自ら其の國を號して吐谷渾と曰う。

顯宗成皇帝上之下咸和五年（庚寅，330年）

【またまた郭默討伐へ】

■ **〔郭默討伐の決定〕** 春，正月，劉胤の首は建康に至る。司徒の**導**は**郭默**の驍勇にして制し難きを以て、己亥（1），大赦し，胤の首を大航に梟し，默を以て江州刺史と為す。太尉の**侃**は之を聞き，袂を投げて起ちて曰く、

「此れは必ず ^{いつわり} 詐也。」

即ち兵を將いて之を討たんとす。默は遣使して妓妾及び絹を送り、並びに中詔を寫して侃に呈す。參佐の多くは諫めて曰く、

「默が詔を被らざれば、豈に敢えて此を為さんや！若し進軍せんと欲すれば、宜しく詔報を待つべし。」侃は厲色して曰く、

「國家（天子）は年幼くして、詔令は胸懷より出でず。劉胤は朝廷の禮する所と為り、方任は才に非らずと雖も、何に緣りてか猥りに極刑を加えるや！（6-062p）郭默は勇を恃み、所在は貪暴なり。大難を新たに除き（蘇峻討伐）、禁網の寛簡なるを以て、際會に因りて其の從横を ^は 驕せんと欲す耳！」使いを發して上表して狀を言い、且つ導に書を與えて曰く、

「郭默は方州（州の刺史）を殺し、即ち用いて方州と為せば、宰相を害して便ち宰相と為らん乎？」

導は乃ち胤の首を収め、侃の書に答えて曰く、

「默は上流之勢に據りて、船艦有りて資を成すを加える、故に苞含（包み込み）隱忍して、其の地を有せ使む、朝廷は以て潜かに嚴する（戒嚴）を得るべし。足下の軍到るを俟ちて、風發（素早く）して相い赴かん、豈に ^{したが} 遵いて時の ^{くら} 晦きを養い以て大事を定める者に非ず邪！」

侃は笑いて曰く、

「是れ乃ち遵いて時の賊を養う也！」

■ **〔庾亮も郭默討伐に参加〕** 豫州刺史の**庾亮**も亦た默を討つを請う。詔して亮に征討都督を加え、歩騎二萬を帥いて往きて侃と會せしむ。

■ **〔桓宣から人質を取る〕** 西陽太守の**鄧岳**、武昌太守の**劉詡**は皆な桓宣の默と同じくするを疑う。豫州の西曹王の**隨**は曰く、

「宣は尚ほ祖約にすら附かず、豈に肯て郭默と同じくせん邪！」

岳、詡は隨を遣わして宣に詣りて之を觀しめ、隨は宣を説いて曰く、

「明府は心は爾らずと雖も、以て自ら明らかにする無く、惟だ賢子を以て隨に付す有る耳！」

宣は乃ち其の子の戎（元は劉胤の参軍で郭默の参軍になり、郭默は桓戎を遣わして桓宣に救いを求め、偽り許す、故に疑われる）を遣わして隨と俱に陶侃を迎えしむ。侃は戎に辟して掾と為し、宣に上して武昌太守と為す。

【石勒は天王即位】

後趙 **〔石勒は天王即位し政治体制確立〕** 二月，後趙の群臣は後趙王の勒（字は世龍、上黨の武郷の羯人）に皇帝に即位するを請う。勒は乃ち大趙天王と稱し、皇帝の事を行う。妃の劉氏を立てて王后と為し、世子の弘を太子と為す。其の子の宏を以て驃騎大將軍、都督中外諸軍事、大單于と為し、秦王に封じる。斌を左衛將軍と為し、太原王に封じる。恢を輔國將軍と為し、南陽王に封じる。中山公の虎を以て太尉、尚書令と為し、進爵して王と為す。虎の子の邃を冀州刺史と為し、齊王に封じる。宣を左將軍と為す。挺を侍中と為し、梁王に封じる。又た石生を封じて河東王と為し、石堪を彭城王と為す。左長史の郭敖を以て尚書左僕射と為し、右長史の程遐を右僕射と為し、吏部尚書を領せしめ、左司馬の夔安、右司馬の郭殷、從事中郎の李鳳、前郎中令の裴憲は、皆な尚書と為し、参軍事の徐光を中書令と為し、秘書監を領せしむ。自餘の文武は、封拜して各々差有り。

後趙 **〔石虎は大單于にならず不満〕** 中山王の虎は怒り、私に齊王の邃に謂って曰く、

「主上は襄國に都するより以來、端拱（端坐拱手）して成を仰ぎ、吾が身を以て矢石に當てること、二十餘年、南に劉岳（前卷咸和二年）を擒とし、北に索頭（前卷咸和二年、弁髮の者）を走らせ、東に齊、魯（92卷）を平らげ、西に秦、雍（前趙を滅ぼし苻氏姚氏を降すこと）を定め、十有三州に克つ。大趙之業を成す者は、我也。大單于是當に以て我に授くべし、（6-063p）今乃ち以て黃吻（鳥雛の黄色い嘴、少年）の婢兒に與える、之を念うに人をして氣塞ぎ、寢食する能わざら令むなり！主上晏駕之後を待ちて、復た種を留めるに足らざる也。」

後趙 **〔石虎は祖約一族誅殺〕** 程遐は勒に謂って曰く、

「天下は粗ぼ定まり、當に逆順を顯明にすべし、故に漢の高祖は季布（楚の項羽配下、後に劉邦に仕える）を赦し、丁公（秦末の武將丁固、劉邦から「我らは好漢。互いに傷つけ合う必要があるか」と言われ劉邦を見逃し、後に劉邦の元に参じるも、丁固の帶を搦んで軍の中に投げ、「丁公は項羽の臣下なのに不忠を為す。項羽が天下を失ったのは丁公のせい」と斬首）を斬る。大王は兵を起こしてより以來、其の君に忠なる者を見て輒ち之を褒し、背叛して臣ならざる者は輒ち之を誅し、此れ天下の盛徳に歸する所以也。今祖約は猶ほ存し、臣は竊かに之に惑う。」

安西將軍の姚弋仲も亦た以て言を為す。勒は乃ち約を收め、其の親屬中外百餘人を并せて悉く之を誅し、妻妾兒女（晉書祖約傳には婦女）は諸胡に分け賜わる。

後趙 **〔王安は祖逖の庶子道重を救う〕** 初め、祖逖に胡奴有りて王安と曰い、逖は甚だ之を愛す。雍丘に在り、安は謂って曰く、

「石勒は是れ汝の種類なり、吾も亦た爾一人に在る無し。」

厚く資送し而して之を遣る。安は勇干を以て、趙に仕え、左衛將軍と為る。約之誅せらるに及び、安は歎じて曰く、

「豈に祖士雅（祖逖の字は士雅）をして後無から使む可けん乎？」

乃ち往きて市に就きて刑を觀る。逖の庶子の道重は、始めて十歳なり、安は竊かに取りて以て歸り、之を匿し、服を變じて沙門と為す。石氏の亡びるに及び、道重は復た江南に歸る。

■ **〔陶侃は郭默を討伐〕** 郭默は南（尋陽より南に奔る）に豫章に據らんと欲し、太尉の侃の兵至るに會し、默は出でて戦い、利あらず、城に入りて固く守り、米を聚めて壘と為し、以て餘り有るを示す。侃は土山を

築きて之を臨む。**三月**、**庾亮**の兵は湓口に至り、諸軍は大いに集まる。**夏、五月**、乙卯（19日）、**默**の將の**宋侯**は**默**の父子を縛して出で降る。**侃**は**默**を軍門に斬り、首を建康に傳え、同黨の死者四十人なり。詔して**侃**を以て江州を都督し、刺史を領せしむ。**鄧岳**を以て交、廣諸軍事を督し、廣州刺史を領せしむ。**侃**は巴陵に還り、因りて鎮を武昌に移す。**庾亮**は蕪湖に還り、爵賞を辭して受けず。

後趙 趙將の**劉征**は衆數千を帥い、海に浮かびて東南の諸縣を抄し、南沙都尉の**許儒**を殺す。

前涼 **〔前涼は河南を取り、後趙に属せず〕** **張駿**は前趙之亡びるに因り、復た河南の地（前卷咸和二年に失う）を收め、狄道に至り、五屯の護軍を置き、趙と境いを分ける。**六月**、趙は鴻臚の**孟毅**を遣わして**駿**を拜して征西大將軍、涼州牧とし、九錫を加える。**駿**は之が臣と為るを恥じ、受けず、**毅**を留めて遣らず。

丁零 初め、丁零の**翟斌**は、世々康居（カザフスタン南部、大宛の西北）に居り、後に中國に徙り、是に至りて趙に入朝す。趙は**斌**を以て句町（雲南省蒙自道通海県の東北、現・玉溪市通海県）王と為す。

後趙 **〔石勒は皇帝即位〕** 趙の群臣は固く尊號を正さんと請い、**秋、九月**、趙王の**勒**は皇帝に即位す。大赦し、改元して建平とす。文武は封進して各々差有り。其の妻の**劉氏**を立てて皇后と為し、太子の**弘**を皇太子と為す。

後趙 **〔徐光は石虎排除を進言するも躊躇〕** **弘**は好く文を屬し、親ら儒素を敬す。**勒**は**徐光**に謂って曰く、「**大雅**（石弘の字）は愔愔（安和な貌）として、（6-064p）殊に將家の子に似ず。」

光は曰く、

「**漢祖**は馬上を以て天下を取り、**孝文**は玄默を以て之を守る。聖人之後は、必ず殘に勝ちて殺を去る（孔子の言）者有るは、天之道也。」

勒は甚だ悦ぶ。**光**は因りて説きて曰く、

「**皇太子**は仁孝溫恭なり、**中山王**は雄暴にして詐り多く、**陛下**が一旦不諱なれば、臣は恐るに社稷は太子の所有の非ざる也。宜しく漸く**中山王**の權を奪いて、太子をして早く朝政に參ぜ使むべし。」

勒は心に之を然りとするも、而して未だ従う能わず。

後趙 ■ **〔趙は計略で襄陽を獲る〕** 趙の荊州監軍の**郭敬**は襄陽を寇す。南中郎將の**周撫**は沔北の軍事を監し、襄陽に屯す。趙主の**勒**は驛書を以て**敬**に敕して退きて樊城に屯ぜしめ、之をして旗幟を偃藏して、寂若無人（人が居ないが如く寂然とす）なら使め、曰く、

「彼が若し人をして觀察せ使めれば、則ち之に告げて曰く、『汝は宜しく自愛して堅守すべし、後七八日にして、大いに騎は將に至らん、相い策せんとし、（汝は）復た走るを得ざらん矣。』」

敬は人をして馬を津に於いて浴せ使め、過り而して復た始まり、晝夜絶えず。偵者は還りて以て**周撫**に告げ、**撫**は以て趙兵の大いに至ると為し、懼れ、武昌に奔る。**敬**は襄陽に入り、中州の流民は悉く趙に降る。**魏該**の弟の**遐**は其の部衆を帥いて石城より**敬**に降る。**敬**は襄陽城を毀し、其の民を沔北に遷し、樊城に城きづきて以て之を成る。趙は**敬**を以て荊州刺史と為す。**周撫**は坐して官を免ぜらる。

後趙 **〔休屠の王羌は前涼に逃げ、張駿は遂に後趙に称藩〕** 休屠の王**羌**（石武の部落なり）は趙に叛し、趙の河東王の**生**は撃ちて之を破り、**羌**は涼州に奔る。西平公の**駿**は懼れ、**孟毅**を遣り還し、其の長史の**馬詵**をして臣と稱して趙に入貢せ使む。

■ 更に（蘇峻の乱で多く焼失したがゆえ）新宮を造る。甲辰（10日）、樂成王の**欽**を徙して河間王と為し、彭城王（雄が蘇峻に付いて誅すのあと）の**紇**の子の**浚**を封じて高密王と為す。

大成 ■ **〔李壽は巴東の建平を攻める〕** **冬、十月**、成の大將軍の**壽**は征南將軍の**費黑**等を督して巴東の建

平を攻め、之を抜く。巴東太守の**楊謙**、監軍の**毋丘奥**（毋丘儉の孫、255年の乱で父毋丘宗は呉に使者、そのまま呉に仕え280年西晋に許され奥も仕える）は退きて宜都を保つ。

顯宗成皇帝上之下咸和六年（辛卯，331年）

後趙**春，正月**，趙の**劉征**は復た婁縣（江蘇省金陵道丹徒県、現・鎮江市丹陽市）を寇し，**武進**（江蘇省金陵道丹徒県、現・鎮江市丹陽市）を掠め，**郗鑒**は撃ちて之を卻く。

■**三月**，壬戌（1日、この年元嘉暦では二月と四月が壬戌朔となる）朔，日食之れ有り。

後趙**〔續咸の苦諫、徐光の助言と人材登用〕夏**，趙主の**勒**は鄴に如き，將に新宮を營まんとす。廷尉の上黨の**續咸**は苦諫し，**勒**は怒り，之を斬らんと欲す。中書令の**徐光**は曰く、

「**咸**の言用いる可からざるとも、亦た當に之を容るべし、奈何ぞ一旦（一度だけの）直言を以て列卿を斬らん乎！」

勒は歎じて曰く、

「人君と為り、自ら専らにするを得ざるは是くの如し乎！匹夫は家に貲の百匹に滿つさえ、**(6-065p)**猶ほ市宅を欲す、況んや富の四海を有する乎！此の宮は終には當に之を營むも、且くは敕して作るを停めん、以て吾が直臣之氣を成さん。」

因りて**咸**に絹百匹、稻百斛を賜る。又た詔して公卿以下歳ごとに賢良方正を挙げしめ、仍って舉人をして更に相い薦引するを得令め、以て賢を求める之路を廣める。明堂、辟雍、靈台を襄國城の西に起こす。

大成**〔李壽は楊難敵を降す〕秋，七月**，成の大將軍の**壽**は陰平、武都を攻め，**楊難敵**は之に降る。

後趙**九月**，趙主の**勒**は復た鄴宮を營み，洛陽を以て南都と為し，行台を置く。

■**〔沖幼の帝は王導を拜すべきか〕冬**，太廟に蒸祭（冬の祭り）し，詔して胙（祭りの余りの肉）を司徒の**導**に歸し、且つ命じて下り拜する無からしむ。**導**は疾いと辭し取て當たらず。初め、帝は即位して沖幼なり，**導**を見る毎に必ず拜し，**導**に手詔を與えれば則ち云う、

「惶恐として言う、

中書が詔を作れば則ち曰う、

「敬して問う。」

有司は議す、

「元會の日、帝は應に**導**を敬すべきや不や？」

博士の**郭熙**、**杜援**は議し、以て為す、

「禮に拜臣之文は無く、謂うに宜しく敬を除くべし。」

侍中の**馮懷**は議し、以て為す、

「天子は辟雍に臨み、三老を拜す、況んや先帝の師傅をや！謂うに宜しく敬を盡くすべし。」

侍中の**荀弈**は議し、以て為す、

「三朝（元旦、歳の朝、月の朝、日の朝）之首、宜しく君臣之體を明かにすべし、則ち應に敬せず。他日の小會の若きは、自ら禮を盡くす可し。」

詔して之に従う。**弈**は、**組**之子也。

▲■**〔慕容廆は東晋陶侃に前趙を挾撃の提案〕****慕容廆**は遣使して太尉の**陶侃**に箋を與え、勧めるに以て兵を興して北伐し、共に中原を清めんと。僚屬の**宋該**等は共議し、以て、

「**魔**は功を立てること一隅にして、位は卑しく任は重く、等差は別無く、以て華、夷を鎮するに足らず、宜しく表して**魔**の官爵を進めるを請うべし。」

参軍の**韓恆**は駁して曰く、

「夫れ功を立てる者は信義の著われざるを患え、名位の高からずを患えず。**桓**、**文**は匡復（匡正興復）之功有れども、先ず禮命を求めて以て諸侯に令せず。宜しく甲兵を繕い、群凶を除き、功成る之後に、九錫は自ら至らん。君を邀えて以て寵を求めるに比せば、亦た榮ならず乎！」

■▲[慕容**魔**の待遇の議論]**魔**は悦ばず、**恆**を出だして新昌（遼東郡の県、奉天省奉遼瀋道海城県の東、現・鞍山市海城市）の令と為す。是に於いて東夷校尉の**封抽**等は疏して**侃**の府に上し、**魔**を封じて燕王と為し、大將軍の事を行わしめんを請う。**侃**は復た書して曰く、

「夫れ功成りて進爵するは、古之成制也。車騎（慕容**魔**）は未だ官の為に**勅**を擢く能わずと雖も、然るに忠義にして誠を竭くす。今箋を騰らせて上聴し、可不（可否）、遲速は、當に天台（晉室）に在るべき也。」

令和3年4月13日 翻訳開始 11906 文字

令和3年4月19日 翻訳終了 24259 文字

令和3年11月26日 書下し終了 24710 文字